
インフィニット・ストラトス -ZとX-

フォグナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス - ZとX -

【Nコード】

N2988BA

【作者名】

フォグナス

【あらすじ】

IS学園に放り込まれた、世界で二人目のISを起動させた男、神原零児。

女だらけの環境で、彼と仲間たちはどんな物語を紡ぐのか。

IS×ロックマンゼロという異色すぎる二次創作です。利用する設定に一部ロックマンXも混ざっています。

e p・0 先行き不安のスクールライフ(前書き)

ブログなので、短いです。

ep.0 先行き不安のスクールライフ

それはいつのぐらいの出来事だったろうか？

『世界で初めてISを起動させた男！？』

こんなテロップと共にテレビに映った少年を、大変だなあと哀れんでいたのは……

いったいいつの事だったろうか？

「……君、かんば……く……神原君？神原君！？」

「……え、あ、はい！？」

そんな現実逃避も、俺の目の前にいる女性により中断させられた。

……え？あの、なんで泣きそうになっていらっしゃるのですか？

「えっと、『お』の次は『か』で、次は神原君の自己紹介の番なんだけど、や、やってくれないかな？」

いや、それって泣きそうになりながら言う事じゃないような……

そんな事を思っていると、目の前の女性は目に涙を浮かべはじめた。

「あの、そうやって無口で睨むって、お、怒ってるんですか？私が悪いなら謝りますから、あの、その……」

別に睨んでないんだけど……

兎も角、俺が怒っていると勘違いしているようだ。

「大丈夫ですよ、山田先生。ただ考え事をしてただけですし。あ、自己紹介でしたっけ？」

そう目の前の女性、山田先生に語りかけ、席を立ち、黒板前に向かう。

振り返ると、そこには女子、女子、女子。
見事に女子しかいなかった。

いや、目の前の席になんか俺をキラッキラした瞳で見つめてくる男子が一人いるか。

目を閉じ、ため息を一回。

……どうしてこうなったんだ？

そう思いながらも、俺は目を開け、口を開いた。

「あー、神原零児です。まあ、見ての通り男です。……これからよろしく願います」

そう言つて、頭を下げる。

頭をあげたら、女子からの『他に何か言わないのか？』光線が。

「……以上です」

俺の一言に、期待の眼差しを向けていた女子がずっこける。

仕方ないだろ？

俺だって、こんな女の園に放り込まれていっぱいいいんだよ！

誰が……誰が……

（誰が男の俺がIS学園に放り込まれるなんて予想出来るよ？）

そう、ここはIS学園。

女性のみが扱えるパワードスーツ、インフィニット・ストラトス、通称ISの操縦者を養成する学園だ。

何で男の俺がIS学園なんかにいるのか。

話は簡単。俺もISを起動させてしまったから。

詳しい話はまた今度にも。

自己紹介を終え、自分の席へ戻る。

その間も、ビシビシ突き刺さる女子からの視線。

「……先行きが不安だ……」

まずはこの視線に慣れないとなあ……

e p・0 先行き不安のスクールライフ（後書き）

見切り発車でやっちゃった感。

なのはの二次創作がちょっと行き詰まったので、気分転換がてらや
っていききたいと思います。

e p . i 担任は世界最強（前書き）

タイトルにあるけど、実は千冬さんの出番はそんなになかったり。
なんというタイトル詐欺。

相変わらず短いですが、よろしければどうぞ。

ep・1 担任は世界最強

あのと、自己紹介は特に波乱もなく進んでいった。

そして、最後の一人が終わり、しばらく経った頃、

「この様子では、自己紹介は終わったようだな」

教室の前の扉を開け、一人の女性が教室に入ってきた。

その女性を、俺は知っていた。

いや、むしろ今の世の中、あの人を知らない人はいないだろう。

ブリュンヒルデ
世界最強、織斑千冬。

世界中のあらゆる人から、畏敬と嫉妬、憎悪の視線にさらされる事を運命付けられた、いわば悲劇の強者ってところか。

畏敬の視線は、彼女に憧れる人々から。嫉妬の視線は彼女を越えたいと願い、ついぞ叶わなかった人々から。

そして憎悪の視線は、ISの台頭により立場を低くされた男性のほとんどから。

ちなみに俺はと言えば……どれも無い。

憧れたところで、ISを使えなかった自分が彼女にはなれないので、畏敬の念はない。

嫉妬したところで彼女が墜ちるわけではないので嫉妬もしない。

彼女を憎んだところで、男が再び台頭できる訳じゃないので憎悪も

しない。

まあ、憧れの点は、今はIS使えるじゃんというのは置いて。

とにかく、適度な無関心、とでも言えばいいか。

すれ違ったら挨拶はするが、そこ止まり。

これぐらいの関心度合いだ。

ただ……

「げっ！千冬姉！？」

スパアンツ！

「学校では織斑先生と呼べ、馬鹿者が」

現在の状況には関心を持たざるを得ない。

状況を簡単に言えば、このクラス、一年一組にもう一人いる男子が、織斑千冬……織斑先生か、に出席簿でひっぱたかれたって感じ。

「ああ、山田先生、クラスへの挨拶を押し付けてしまってますまなかつた」

そう言つて、山田先生へ向けていた視線をこちらへ移し、凜とした声でいい放った。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。一人前にするとは言わん。この一年間で君たち新人を、せめて使い物になるヒヨっ子程度にまで鍛えることが仕事だ。いいか？私の言う事はよく訊け。逆らっても言い

が訊け、いいな？」

なんと独裁。

それって生徒に言う事としては、不適切極まりない発言なのでは？

ほら、引いちゃったのか、周りの女子もしーんと静まり返っちゃってるし……

「……き」

き？

「きゃあああああああ！！！」

いきなりの大音量に思わず耳を塞ぐ。

が、それでもこの大音量を防ぎきる事は出来ず、かなりの音が耳を襲う。

「本物！本物の千冬様よ！！」

「私、ずっと憧れてたんです！だからこの学園に入ろうと！！」

他にもキヤイキヤイと騒ぎ立てる女子たち。

さ、さっきの静けさは、引いてたからじゃなくて、溜めだつたんだな。

「はあ……よくまあ、これだけの馬鹿者を集めた物だ。わざと私のクラスに馬鹿者を集めているのか？」

せ、先生、生徒を馬鹿者馬鹿者連呼するのはいかな物かと思いま

す。

「織斑先生厳しい!!」

「だがそれがいいのよ!!」

「もっと叱って!調子づかないように躑して!!そして妹にして!!」

いや、皆さんや、なんで黄色い声を加速させるんだよ?

つーか三番目のセリフ言ったやつ!妹にしてってなんだよ!?養子にでもなるのか!?

「うぐぐ……千冬姉、なんでこんな所に……」

先ほどの打撃から復活した男子が口を開くが、

スパパーンッ!

「織斑先生と呼べと言ったはずだが?」

今、手は一回しか動いてないように見えたが、音からして二発殴った!

どれだけ腕を早く動かせるんだよ、この人!?

もしかして化け物なんじゃ……

その後、今の男子と織斑先生のやりとりで、二人が姉弟だとわかり、さらに一騒ぎあったが、そこは割愛させていただこう。

で、授業の間にある中休み。

「えっと、神原さんだっけ?いやあ、こんな女だらけの空間に男一

人じゃなくてよかった」

「そいつは俺もだ。同じ男同士、仲良くやろうぜ、織斑さん」

俺の席の右斜め前にの席にいる、このクラスもう一人の男子、織斑が話しかけてきたので、それに答える。

……ん？下の名前ではないのか？

いや、いきなり下の名前で呼んだら馴れ馴れしいにもほどがあるだろう？

それに、実は自分の事でいっぱいっばいで、織斑の自己紹介聞いてなかったりする。

名字は、織斑先生の弟らしいから、まあ推測できるし。

「一夏でいいし、さん付けもいらなくて、名字なんてなんかよそよそしいし」

ほう、下の名前は一夏と言うのか。
覚えとこ。

「わかった、だったら俺の事も零児でいいし、さん付けはなしでたのむ」

「わかった。改めてよろしくな」

「おうよ」

ここで握手。

握手ってのは大事だね。

相手に手を許すって事は、相手を信頼してるって事だしな。

「こ、これが男の友情！」

「青春ね」

「神×織……いけるわね！」

……外野がなんか言ってるけど気にしないし、聞こえない。

聞こえてないってば！！

特に最後の言葉は知りません！！

e p . i 担任は世界最強（後書き）

千冬さんはきつと、本気でしたら出席簿で大地を割れると思うんだ。

次回は縦ロール＋タレ目さん登場の巻。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2988ba/>

インフィニット・ストラトス -ZとX-

2012年1月11日10時45分発行